九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「人かた」「人こと」「ひとも」考 : 『御津の浜松』最終巻読解ノート

辛島, 正雄
九州大学大学院人文科学研究院 : 教授

https://doi.org/10.15017/1516166

出版情報 : 語文研究. 117, pp.16-27, 2014-06-13. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

「人かた」「人こと」「ひとも」考

――『御津の浜松』最終巻読解ノート――

辛島正雄

一　問題の所在

――中納言は吉野姫君になにを訴えたいのか

『御津の浜松』最終巻も終わり近く、行方不明にしてその身を案じていた吉野姫君を、ようやくにしてわがもとに取り戻した中納言は、姫君がすでに式部卿宮の思い人となっている事実は認め、また、姫君と男女の仲ではなかった理由として、宮に、異母兄妹であると偽りの説明した結果、その後は、みずからの恋情を抑え、兄として世話を焼くほかない状況にあった。それでも、思い余って苦衷を訴えることもあり、吉野尼君の一周忌の近づいたある「人ずくななる昼つかた」（四二九頁。以下、とくにことわらないかぎり、『御津の浜松』の引用は、池田利夫校注・訳『新編日本古典文学全集27　浜松中納言物語』［二〇〇一年、小学館。以下、『全集』と略称］による）、袖で顔を隠す姫君に、清水で別れて行方がわからなくなって以来、「ひたぶるに世を思ひ過ごしし心のほど」を、「かき尽くし、うち泣き、さめざめと」語り、唐后が夢に現れたことなども告げて、

むすびける契りはことにありけるを
　この世かの世とたのみけるかな（四三〇頁）

と、契りは結べずとも、あなたは、唐后ゆかりの特別な存在であると、深い思いを訴える。それにつづけて、さらに訴えかけたことばが、次のようなものであった。

じつは、さきに、拙稿「『けぶりのさがのうれはしさ』――『御津の浜松』最終巻読解考――」（『むらさき』48輯、二〇一一年一二月）において、いささか触れるところのあった箇所なのであるが、

あらためてその全文を掲げ、検討の俎上にのぼせることとする。本文は、池田利夫編『浜松中納言物語〈五〉広島市立浅野図書館蔵』（一九七二年、笠間書院）により、翻字には私に句読点・濁点等を付し、補った文字は（　）で括った。併せて、読解上の問題点をはっきりさせる便宜として、厳格・誠実な施注に学ぶところの多い遠藤嘉基・松尾聰校注『日本古典文学大系77篁物語・平中物語・浜松中納言物語』（一九六四年、岩波書店。『御津の浜松』の校注は、松尾氏。以下、『大系』と略称）の頭注・補注に示された口語訳を、対訳形式で見較べられるよう、補足部分を一部削るなど、文字数を調整のうえ、傍記した。

（ままよ、）よしや、（意外な他人への御なびきのことは、）思ひの外なるしほやく煙は、我（が）（自分の御意志で行なわれている事でもないのです。）御心とある事にもあらずかし。我（が）（私の胸が）（晴れそうもなく、）むねのひまあき、（又、）心やす（心が休まりそうもない）（あなたとの）宿縁の憂うべきさまは、）まるまじき契りのうれはしさは、人の御おこたりにのみ思（ふ）（思うべきではありませんよ。）べきにあらずや。（こんなふうな有様では、あなたを、雲居にあるものと聞きなし申し上げたままで死んでしまうことだったでしょうのに、）かばかりにては、雲ゐにきゝなし奉りてこそは、命をとぢめ侍らましに、（あなたの御怠慢とばかりた（あなたの）御様子でありながら、）（私に）見られ知られないでは居られまいと、（あなたが）し御ありさまながら、「みえしられでは、えあらじ」と、（お思いつきになったようである、一つの方向のことによって、）おぼしよりけん人かたにより、宮がわざわざ（私を）おさがし（求めあそばしていた時に、）させ給へりしに、御心のおもむき、思（ひ）侍るに、すべて、よろづも、人とむまれけるよの思（ひ）いで、たゞ、（あなたの私に対する）お心持を思いますのにつけて、（このたった一つの事にこそ（あるのですよ）。）この人ことにこそは、うれしく、あはれなるふしに、（うれしくしみじみと心にしみ入る点として、）こ（来世においてもきっと自然思い出されるはずのことです。）の世ならでも、思ひ出（で）らるべうもこそ侍れ。そればかりに、いのちをも、心をもかけて、「めぐらひ侍らん（（私が）この世に生きながらえましょう限りの（あなたの）御世話を、）かぎりの御うしろみ、いかでつかまつり侍らばや」（どうかして御奉仕申し上げたいものだ）と（思って）、（心が落ちつかないで、唐土まで、ふらふらとひかれてでかけていった心なのですけれど、）思ひうかれ、もろこしまであくがれまかりし心なれども、（私に）（知られようとお思いになった人（あなた）が、）「しられん」とおぼしけるひともこそ、（これほどまでに思い捨てておりますこの世を思い捨てさせない束縛のたねでしたね。）かばかり思（ひ）すて侍（る）よの、ほだしなりけれ。（七四～七六頁）

この中納言のことばについて、最新の注釈書である中西健治著『浜松中納言物語全注釈 上巻・下巻』（二〇〇五年、和泉書院。以下、『全注釈』と略称）では、段落末にもうけた【評】において、吉野姫君に訴える中納言の言葉はやや大袈裟ではあるが、

自らの思いのたけをくまなく述べているようである。その最たるものは、「人と生まれける世の思ひ出、たゞこの人ことにこそは」という言葉である。苦しい息の下から中納言を求めた姫君の心に大いに感激し、式部卿の宮と契りを結んだことを承知のうえで、姫君を慰め、さらに誠心誠意の奉仕を尽くそうというのである。（一二六〇頁）と述べ、『全集』の頭注でも、「中納言が、ここで『めぐらひはべらむかぎりの（姫君の）御後見』となる決意を表明する。」（四三一頁）と、注意を喚起している。

たしかに、式部卿宮のもとで人事不省に陥りながらも、宮からの問いかけに、「中納言に告げさせ給へ」（四一〇頁）と吉野姫君が答えたことで、中納言は宮から緊急の連絡を受け、ようやく姫君との再会がかなったのである。中納言は、そうした経緯を宮から知らされ、姫君が、「さばかり思ひ沈むらむ心にも、われに『知られむ』と思ひけるほどのかなしさ」（四一七頁）を思うと、深い感動を禁じ得なかった。ここでの中納言のことばに、「さばかり見し御ありさまながら、『みえしられでは、えあらじ』と、おぼしよりけん人かたにより、宮の、わざと尋（ね）させ給へりし」とあるのは、そのような事情を承けてのものである。ただし、なにを訴えたいのか、いわんとするところはほぼ理解できるのだが、「……と、おぼしよりけん人かたにより」とある「人かた」なる表現が、よくわからない。

二　「人かた」存疑

この「人かた」について、最終巻を含む最初の注釈書である宮下清計校註『新註国文学叢書　浜松中納言物語』（一九五一年、講談社。一九九九年覆刻、クレス出版。以下、『新註』と略称）では、本文を「一方（ひとかた）に」（三七八頁）と整定し、頭注に「吉野姫を指す。」と注記、「私に逢はないでは居られないとお思ひ下さつたあなたのお言葉により」と訳している。「一方」は、ひとりのお方、と解したのであろうか。「あなたのお言葉により」というのは、文脈に整合させようとした、かなり大胆な意訳である。

これに対して、『大系』の補注**九一七**では、

「人かた」は尾上本も「人かた」である。「ひとかた→一方」の意とみて、「宮のものになった姫の心は大部分はそれにひかれているだろうが、一方（一方向）、つまり、一部分は自分（中納言）に見られ知られたいという心持がのこっている」というような意味での「一方」と解いたが、用例から考えても、なおすこぶる疑わしい。（五〇七頁）

として、本文・解釈に問題のあることを説いている。これに

ついて、久下晴康編『浜松中納言物語』（一九八八年、桜楓社。以下、『桜楓』と略称）の頭注では、「『人かた』を『ひとかた』（一方）と解する説があるが、いかが。」（二二四頁）と疑義を呈しながらも、「人かた」についての解は示していない。

『全集』では、「ひとかたに」（四三一頁）と本文を整定し、頭注で、

一方的に、の意。底本、尾上本とも「人かた」とあるのを、意によって改めた。姫君が、そう一途に思い寄られたからこそ、宮の心を動かせたとする。

と説き、『源氏物語』「総角」巻から「一方に」の用例を掲げたうえで、「私に見られ、知られないではいられないとお思いつきになったあなたお一人の力によって」と訳している。『全注釈』では、「人かた」の本文のまま、とくに先行諸注釈書への言及もなく、「私に会わないではようおれないとお思い寄りになったあなたお一人の思いによって」（一二五三頁）と口語訳する。

以上のように、「人かた」については、本文校訂も、訳出のしかたも、注釈書によってまちまちであり、いまだ解釈が定まっていないことが窺える。

三　「人こと」は「ひとこと（一言）」である

つづいて、中納言は、「すべて、よろづも、人とむまれけるよの思（ひ）いで、たゞ、この人ことにこそは」と語る。自分にとって、容易に得がたい人身を得たこの世を去るときの思い出とは、ほかならぬ「この人こと」なのであった、というのだが、ここの「人こと」がまた、わかりにくい（なお、浅野本・尾上本ともに「思いて」と表記しているのを、『新註』以下の諸注釈書、すべて「思ひで」と読むが、送り仮名「ひ」を補い、「思ひ出（いで）」と解した）。

「人こと」について、『新註』では、「一（ひと）こと」（三七八頁）と本文を整定し、「唯あなたとお目にかかることが出来たといふ此の一事によつて」と訳している。『大系』の頭注でも、「『人こと』は仮りに『一事』の意に解く。」（四二六頁）と説くいっぽう、補注**九八**では、

「人こと」は尾上本は「人」とだけあって、「こと」はその右傍下方に細書されている。「一事」の意としても「この世であなたとめぐりあったという一事」などの意とも解けようし、又、「一言」の意として「中納言につげさせ給へ」をさすものとも解けよう。（五〇七頁）

と、二様に解釈できることを述べている。

これを承けて、『桜楓』では、「『人こと』を『ひとこと』から『一事』ないし『一言』と解く。後者がよかろう。」（二二四頁）とする。『全集』では、

底本「人こととは（「人こととにこそは」の誤り――辛島注）」とあり、尾上本は「こと」が補入傍記。尾上本の補入を除くなら「ただこの人にこそは」、ひたすら姫君にこそ思い出が残る意となるが、底本の「人こと」を「一言」に改めた。「一事」とも解ける。（四三一頁）

と頭注を施し、「あなたが私の名を呼ばれた、ただその一言にこそあるのです。」と現代語訳している。『全注釈』でも、

底本の「人こと」の箇所、尾上本は「（人ノ）下に補入の印を附し右傍下方に『こと』と細書せり。『人』は猶『一』の転々誤写か」（『尾上本浜松中納言物語』二七七頁）とあることから、「一言」と解する。いま「一言」として口語訳をしておいた。（一二五六頁）

と注釈があり、「ただこの一言でございます。」（一二五三頁）と訳している。

こうして見ると、「人こと」については、『大系』が別案として示した「一言」説が、その後は大勢を占めたことがわかる。

四　「人かた」も「ひとこと（一言）」である

ところで、「人こと」を「ひとこと（＝一言）」の当て字であると認めるならば、その「一言」とは、『大系』の補注にいうとおり、吉野姫君が息の下で式部卿宮に答えた、「中納言に告げさせ給へ」という「一言」を指していると見て過たないのであるが、ここで注意したいのが、「人とむまれけるよの思（ひ）いで、たゞ、この人こと（＝一言）にこそは」と表現している点である。「この一言」というからには、これ以前に、当然、その「一言」についての言及があったはずである。そして、それは、疑いもなく、「さばかり見し御ありさまながら、『みえしられでは、えあらじ』と、おぼしよりけん人かたにより、宮の、わざと尋（ね）させ給へりし」とあるのが該当する。ところが、じっさいには、肝腎の「一言」の語が、そこには見当たらないのだ。そこで、よくよく観察すると、吉野姫君の「みえしられでは、えあらじ」との思いを承けて、式部卿宮が中納言をわざわざ探し当てた、とつづく文章の結び目にある「人かた」の文字が、あらためて注目されてくる。

「人かた」の解釈がいまだ定まらないこと、前述のとおりである。しかるに、吉野姫君の「みえしられでは、えあらじ」

との思いが式部卿宮に伝わり、さらに中納言へと連絡が取られるためには、「中納言に告げさせ給へ」という「一言」が、なにより必要不可欠であった。だとすれば、この落ち着きの悪い文字「人かた」こそが、元来は、「ひとこと」だったのではあるまいか。浅野本の影印でも、「人かた（可多）」と「人こと（己止）」の書体は、かなり近似しているように見える。

そうすると、ここは、「……と、おぼしよりけん（吉野姫君の）ひとこと（＝一言）により、宮の、わざと尋（ね）させ……」と読むことができ、そのように読みさえすれば、文意は、すこぶる明瞭となる。姫君の「ひとこと」について、中納言は、式部卿宮から、「からうじて息のしたに、『中納言に告げよ』と言ふやうに聞こえつる」（四一六頁）と聞かされただけで、直接耳にしたわけではない。「おぼしよりけん」と、過去の推量を表す助動詞が用いられているのは、そのせいである。そして、そのような姫君の「ひとこと」に対する深い思い入れの延長線上に、中納言は、「人とむまれけるよの思（ひ）いで」は、「たゞ、このひとこと」だ、とまで訴えるのである。このような確認を経て、諸注釈書を振り返ると、さきに、「文脈に整合させようとした、かなり大胆な意訳である」と述べた、『新註』の「私に逢はないでは居られないとお思ひ下さつたあなたのお言葉により」との解釈が、結果的には、もっとも正解に近かったことになる。

五　「このひとことにこそは。」で句点にはならない

次に、「人とむまれけるよの思（ひ）いで、たゞ、この人こと（＝一言）にこそは」について、検討してみたい。ここについては、『大系』が、「こそは。」と句点を打って以来、後続の『桜楓』『全集』『全注釈』、さらには須田哲夫・佐々木新太郎著『校訂 浜松中納言物語』（二〇〇五年、勉誠出版）も、すべてそのように読むことで一致する。しかし、むしろここは、唯一の例外である『新註』のように、下文へつづく、と見るべきところではないだろうか。

繰り返しになるが、中納言にとって、瀕死の状態の吉野姫君が、最後にすがりたい人物として自分を名指ししたことへの感動が、その切々たる訴えの中核にある。そして、「こそは（あれ）。」で切ると、姫君のそのような「一言」が、思い出そのものだ、という理解になる。しかし、この前後の文脈をよく見ると、「人とむまれけるよ」＝現世と、「この世なら」ぬ

来世とが対比してあって、現世でのさまざまな（つらいこともあった）思い出が、ほかならぬあなたの「一言」によって（救われ）、来世においても、「うれしく、あはれなるふしに」思い出されるだろう、という展開なのである。それを、「こそは。」で止めてしまっては、ことばの自然ながれが分断され、中納言の痛切な訴えが台無しである。また、係り結びも、「この人ことにこそは」を、「思ひ出（で）らるべうもこそ侍れ。」が受けているのであって、「もこそ侍れ」の「こそ」のほうが、かえって不審・不要な文字である。語気を強めようとする意識が、よけいな重複を招いたものであろうか。

六　「思ひうかれ～心なれども」は補足説明である

以上のような、「人とむまれけるよの思（ひ）いで」となる吉野姫君の存在の大きさを確認したうえで、中納言は、「めぐらひ侍らんかぎりの御うしろみ、いかでつかまつり（尾上本「つかうまつり」）侍らばや」と、姫君への終生変わらぬ後見を約束するのであるが、それ以下の解釈についても、『新註』の頭注に、「あくがれまかりし心なれど―或はこの下に若干の脱文あるか。」（三七八～三七九頁）との疑義が出されているほか、『大系』の補注九二〇では、

「もろこしまで」以下「ほだしなりけれ」まで十分解しがたい。脱文があるのかも知れない。「もこそ」（中略）の意や、「かばかり」のさすもの、「思ひすて侍る」の目的語、さらには「もろこしまであくがれまかりし心なれども」とは何をいおうとしたのかなど、その他について、すこぶる疑わしいふしぶしが多い。（五〇七頁）

と述べ、『全注釈』にも、「このあたりのわかりにくさは中納言のあり余る思いに即して文言を展開するところから生じたのかも知れない。」（一二五六～一二五七頁）との見解が示されている。しかし、「思ひうかれ、もろこしまであくがれまかりし心なれども」を、直前の決意表明についての補足説明と見れば、もろもろの不審も、すべて解消されるのである。

「思ひうかれ」は、『全集』の頭注に、「後見となる期待で心が『思ひ浮れ』」（四三一頁）というような、中納言の決意表明を承けることばではなく、下文につづく。『全注釈』では、「『思ひ浮かれ』の下に文を結ぶ語があれば、このあたりはわかりやすい。（中略）原文のままならば、『思ひ浮かれ』て渡唐したとしか解せない。」（一二五六頁）とも述べているのだが、まさに、〈「思ひ浮かれ」て渡唐した〉といいたいのだ。中納言が、決意表明につづいて、わざわざ、「思ひうかれ、……」とことわり（補足説明）を入れるのは、自らの過去の心の遍歴

に照らしても、姫君の後見は当然のことだ、といった思いからなのであろう。ことさらに「もろこしまで」云々といっていることについて、『桜楓』の頭注では、

渡唐を「あくがれまかる」と表現すること、巻三、一四三頁（『全集』二八一頁――辛島注）にもあった。転生した父宮に会うための渡唐が、唐后との縁を結び、さらにそのゆかりの人の世話をすることにあったが如く変容し、いまの中納言の生を支えている。（一二四頁）

と説くが、傾聴すべき意見であろう。『全集』の頭注でも、「故父宮の転生に始まった渡唐が、唐后との契りや若君の誕生、ゆかりの姫君へと連鎖する思いからか。」（四三二頁）と、同趣旨のことを述べている。

七　「それ」が指すのは「このひとこと」である

ところで、中納言の決意表明に先立つ、「そればかりに、いのちをも、心をもかけて」についても、検討しておきたい。さきの本文引用では、この部分の対訳が欠けているのであるが、それは、『大系』になにも注が施されていなかったせいである。では、なんの問題もないかといえば、そうともいえない。『大系』以外を見ると、『新註』の頭注では、「あなたとの真実のおつきあひの上にのみ私の身も心も懸けて」（三七八頁）と訳していて、「そればかりに」については、文脈を意識したかなり説明的な訳出となっている。『桜楓』には、特段の言及はない。『全集』では、「私はそれくらい、命をも心をも投げ打って」（四三一頁）と現代語訳しているが、「それくらい」の意味するところが、曖昧である。『全注釈』では、「『それ』は吉野姫君を庇護すること。吉野姫君を守りお世話することだけに。」（一二五六頁）との注釈を加え、「それだけに命をも心をも捧げて」（一二五三頁）と口語訳している。

まず明らかにすべきは、「そればかり」の「それ」が指す内容であるが、唯一そのことにはっきり言及しているのが、『全注釈』である。ただし、「『それ』は吉野姫君を庇護すること。」という説明では、「それ」があとにくる内容を先取りしていることとなり、不審である。素直に読めば、「それ」は直前の内容を承けるはずであるから、「すべて、よろづも、人とむまれけるよの思（ひ）いで、たゞ、この人こと（＝一言）にこそは、うれしく、あはれなるふしに、この世ならでも、思ひ出（で）らるべうもこそ侍れ。」を承けて、そのなかでも、この世での特別な思い出となるはずだ、と訴えることばの中核にあるキーワード、「この一言」を指すと見るのが、順当である。そして、「ばかり」は、程度ではなく、限定の意。吉野姫君のあの

「一言」があったという一事によって、わたしはこの世に命を繋ぎとめ、思いのすべてを姫君のために捧げて、「めぐらひ侍らんかぎりの御うしろみ、いかでつかまつり侍らばや」と決意した、というのである。

八　「ひともこそ」は「ひとこと（一言）こそ」である

そのあとにつづく「思ひうかれ、もろこしまであくがれまかりし心なれども」は、前述のように、決意表明についての補足説明なので、ことばのながれとしては、「『……いかでつかまつり侍らばや』と（思います）。」で、いったんは閉じられたのである。そして、あらためて、「『しられん』とおぼしけるひともこそ、かばかり思（ひ）すて侍（る）よの、ほだしなりけれ。」ということばでもって、中納言の訴えは結ばれるのである。そのうち、「かばかり思（ひ）すて侍（る）よ」というのは、『全集』の頭注に、「中納言の気持としては棄てたはずの俗世」（四三二頁）とある説明が、妥当である。遡って巻四でも、中納言は、吉野姫君に向かって、

かたちをかへて（山奥に）入りなまほしけれど、ただひとところ（＝吉野姫君）をほだしに思ひ聞こえてなむ、さまでは、え思ひ立ちはべらず。（三六六頁）

と、みずからの思いを語り、姫君の手習の傍らに、

思ひわびあらじと思ふ世なれども
たれゆゑとまる心とか知る（三六七頁）

と書き添えるなど、姫君を、棄てても惜しくない俗世に繋ぎとめる唯一の「ほだし」であると、強く意識していた。

その前の、「『しられん』とおぼしけるひともこそ」については、「もこそ」の用法をめぐって、『大系』と『全集』とで意見が割れるが、内容そのものは、「『みえしられでは、えあらじ』と、おぼしよりけん人かた（↓ひとこと）により」と述べていたことの、繰り返しである。すると、ここでにわかに気になってくるのが、『新註』以来、これまで一貫して、「……とおぼしける人もこそ」と読まれてきたこの箇所も、「人かた」が「ひとこと」からの転訛であったように、同じく、「ひとこと」とあったものを誤写して「ひとも」となったのではないか、という疑いである。「こと（己止の合字）」と「も（毛）」が紛れやすい文字であること、いうまでもない。ここを、「『しられん』とおぼしけるひとこと（一言）こそ」と読むならば、「もこそ」は悪い事態を予測するのが通例だが、ここでは強調である、などという説明も不要となり、すんなり強調表現として、下につづけて読むことができる。ただし、右に掲げた巻四の例もそうであるのだが、「ほだし」は、多く、束縛する

人について用いられることばなので、「人も（ひとも）」を「一言（ひとこと）」と改めることで、かえって違和感を覚える表現になった、との批判は、あり得るかもしれない。『全注釈』では、「思（ひ）すて侍（る）よの、ほだし」について、『古今和歌集』（巻十八・雑下・九五五番・物部良名）の、

世の憂きめ見えぬ山路へ入らむには
おもふ人こそほだしなりけれ

（『古今和歌集』の引用は『新潮日本古典集成』本による）

による旨、注釈で指摘してもいる（この歌は、巻四に、「いかならむ見えぬ山路もがな」［三一〇頁］、最終巻でも、「いかならむ見えぬ山路にも行き隠れにしがな」［四四八頁］と引かれるほか、『源氏物語』などでも、しばしば引歌に用いられている）。

しかしながら、ここまで縷々述べてきたように、中納言の吉野姫君への訴えかけの内実を見定めるとき、その思いの中核にあるのは、紛れもなく、「中納言に告げさせ給へ」と姫君が口にした「ひとこと」への、絶対的ともいうべき傾倒であった。さらには、「ほだし」の例として、同じく『古今和歌集』（巻十八・雑下・九三九番・小野小町）には、

あはれてふ言こそうたて
世の中をおもひはなれぬほだしなりけれ

という歌もあり、そこでは、「あはれてふ言」が「ほだし」とされているのだ。この歌の表現は、一首全体が中納言のことばとも重なりあって、あるいは、小町の歌を念頭に置いた物言いであったか、とさえ思われてくる。ならば、「『しられん』とおぼしける（あなたの）ひとことこそ【あはれてふ言こそ】、かばかり思（ひ）すて侍（る）よの【うたて世の中をおもひはなれぬ】、ほだしなりけれ【ほだしなりけれ】。」と読み解くことは、なんら不自然な点がないばかりか、そのように読んではじめて、吉野姫君への終生変わらぬ後見を誓った中納言が、その思いの原点をあらためて確認することばとして、重くひびいてくるのである。

九　むすび――吉野姫君の「ひとこと」への中納言の思い

最後に、ここまでの検討結果を踏まえた校訂本文を作成し、以下に掲げておく。改訂した箇所には圏点を施し、（　）内に簡単な説明を付すとともに、文脈を辿りやすくするため、〔　〕に括って主語や説明を補った。

よしや、思ひの外なるしほやく煙〔＝姫君がほかの男と結ばれたこと〕は、我〔＝あなた〕（が）御心とある事にもあらずかし。我〔＝中納言〕（が）むねのひまあき〔＝「あくまじき」

の意〕、心やすまるまじき〔あなたとの〕契りのうれはしさは、人〔＝あなた〕の御おこたりにのみ思（ふ）べきにあらずや。かばかりにては、〔あなたのことを〕雲ゐにきゝなし奉りてこそは、〔わたしは〕命をとぢめ侍らましに、〔あなたが〕さばかり見し御ありさまながら、「〔中納言に〕みえしられでは、えあらじ」と、おぼしよりけんひとこと（「人かた」を改訂）により、宮の、わざと〔わたしを〕尋（ね）させ給へりしに、〔あなたのわたしに対する〕御心のおもむき、思（ひ）侍るに、すべて、よろづも、〔わたしが〕人とむまれけるよの思（ひ）いで、たゞ、この〔あなたの〕ひとこと（「人こと」を改訂）にこそは、うれしく、あはれなるふしに、この世ならでも、〔わたしは〕思ひ出（で）らるべうも侍れ（「もこそ侍れ」を改訂）。それ〔＝あなたの「ひとこと」〕ばかりに、いのちをも、心をもかけて、「〔わたしが〕めぐらひ侍らんかぎりの〔あなたの〕御うしろみ、いかでつかまつり侍らばや」と〔思います〕。――思ひうかれ、もろこしまであくがれまかりし〔わたしの〕心なれども……。「〔中納言に〕しられん」とおぼしける〔あなたの〕ひとこと（「ひとも」を改訂）こそ、かばかり〔わたしが〕思（ひ）すて侍（る）よの、ほだしなりけれ。

その趣旨は、けっきょくのところ、「よしや」から「人の御おこたりにのみ思（ふ）べきにあらずや。」までが、中納言の歌の上句、「むすびける契りはことにありけるを」に対応し、以下の、ひたすら吉野姫君の「ひとこと」にこだわった訴えが、下句、「この世かの世とたのみけるかな」に相当するものであることに、気づかせられる。つまり、歌にこめた思いを、さらに詳しく説明して聞かせたのが、このことばだったのである。

以上、本稿では、『御津の浜松』最終巻の、中納言が吉野姫君に苦しい胸のうちを訴え、終生変わらぬ後見の決意を表明するに到ることば全体を取り上げ、つぶさに検討を加えた。その結果、浅野本を翻字したかぎりでは、「人かた」「人こと」「ひとも」と、別々のことばにしか見えないものが、詳細に内容を吟味してみれば、すべては、姫君が式部卿宮に答えた「ひとこと」へと、収斂すべきものなのであった。そして、中納言にとってその「ひとこと」とは、姫君が、いわば命がけで、自分のもとへの帰還を願った証しだったのであり、そのことを思うと、かれの魂は激しくゆさぶられ、おのが全身全霊をかけて応えねばならぬ、「人とむまれけるよの思（ひ）いで」とも、意識されることとなったのである。

中納言の訴えかけに、吉野姫君は、「むげにいらへ聞こえ

ず、沈み入らむもいぶせき心地」がして、

死出の山越えわびつつぞ帰り来し
たづねぬ人を待つとせしまに（四三二頁）

と、かろうじて答えた（中納言の「むすびける」の歌への返歌。なお、『全注釈』では、中納言の歌を「独詠」［一二五〇頁］と解しているが、いかが）のであったが、物語のなかで、これが、中納言に対しての、姫君の最後の歌となる。姫君は、さらにこのあと、式部卿宮の詠んだ歌に答えて、はじめて、

ことの葉やながき世までもとどまらむ
身は消えぬべき道芝の露（四三五頁）

と歌を返し、こちらが、物語内での、姫君の最後の歌であった。いずれの歌にも、死の影が色濃く落ちているが、そのことは、物語の最終局面では描かれない、姫君の行く末（死）を、暗示するものではあろう。それとともに、これらが、姫君とかかわったふたりの男へ向けた、かの女からの永訣の歌でもあるように見えるのは、筆者の思いすごしであろうか。

『御津の浜松』最終巻の読解をめぐっては（じつは、最終巻にかぎらないのだが）、なお問題とすべき箇所が少なくない。残念ながら、不審をおぼえつつも、容易には解決のいとぐちさえ見つからないことも多く、もどかしい思いではあるが、あせらず、すこしずつでも、その不審を解きほぐしてゆくことができれば、と念じている。（二〇一四年五月稿）

（からしま　まさお・本学教授）